



# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（桓文社）  
「郷土とことわざ」（人間の科学新社・共著）等

## 「こぐ、ぬく、かる、とる」

雑草を除去することを、あなたはなんと言いますか？

新潟では大抵の人が「草取り」もしくは「草むしり」と表現するようです。そうそう「草刈り」という言い回しもありますね。こちらは鎌やら電動機器やらの刃物道具を用意して大がかりな作業にとりかかるような感じで、「いやっや、メンドくっせて危ねてば」の声が聞こえてきそうです。

かたや「草むしり」は、語感から何となくベランダの植木か家庭菜園の手入れの感じもしますが、これも「しかもかメンドらて」であります。かといって「草取り」も、意外と力はあるわ、ずっと同じ姿勢をしていると足腰ヤメてくるわ、手はエペペになるわ、あちこちカユカユになるわ、取った草をゴミに出す日は限定されているわでロクなことありません。ともすると、近所の元あねさが顔だして「こっちもしてくんなせ、あんたのどこから種が飛んできたっけね」と圧力をかけてくることも考えられます。

クローバーやカラスノエンドウ、イヌダテは一輪ごしに、ヨモギやレモンバームは香りを楽しみつつ虫よけに、猫じゃらしは猫の遊び道具にとそれなりに密かに野草を楽しんでいる者にとっては「みばわーり」と言われようが「のめしこき」と言われようが「メンド、シンド、ナンギ」が「草取り」であります。

さてこの「草取り」ということばは“東日本用語”、西日本（主に京阪神）では「草引き」という言い方が主流のようです。こちらは、生い茂る草を「えいや」と引っぱるような言い回しです。ほかに、西日本では「草抜き」ということばもみられますが、「ゴボウをぬく」「大根をぬく」のように、地中深くから抜くイメージです。なにやら外来種のような根の張る丈の

高い草を引っこぬく感じがします。

そういえば、新潟ではゴボウや大根を抜くことを「こぐ」と表現しています。こちら「草こぎ」の表現は、農・林業に携わるその道の達人の作業を連想させます。

稲作用語に、稲穂からモミをとる作業を「扱（こ）く」といいますが、「こく」が新潟弁らしく（？）「こぐ」に大変身。「雑草除去」用語として大穀倉地帯新潟にふさわしい語感を醸し出しています。言われてみれば、丈の高い雑草を渾身の力で抜く作業は「草取り」でもなければ「草刈り」でもなければ、力を込めて行う「草こぎ！」ですね。

一方、なんとなく軽作業のような感じの「草取り」ですが、本来は田植えのときの雑草取りの作業でした。今でも「田の草取り」と農家の方が口にするところから、こちらも農作業用語といえましょう。

「こぐ」「ぬく」「かる」「とる」、地域のなりわいは、多彩な表現を生みだしてきたのです。

なお、2016年6月、兵庫県篠山市が高齢化する農家負担軽減で「膝丈の草に寛容なまちづくり」の啓発に乗り出しました。「雑草も膝丈までなら近所の人には寛容に！」とのことで、私も見習う所存であります！

